

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 28 日現在

機関番号： 12701  
 研究種目： 若手研究(B)  
 研究期間： 2010～2011  
 課題番号： 22720242  
 研究課題名（和文） 近世地方の都市・農村間における交流関係の成立と変容過程の研究

研究課題名（英文） The research of the formation and the change of the interchange between cities and villages in local society during the Edo period

## 研究代表者

多和田 雅保 (TAWADA MASAYASU)  
 横浜国立大学・教育人間科学部・准教授  
 研究者番号：10528392

研究成果の概要（和文）：近世の信濃国伊那地方で、飯田城下町の町人による、近郊村である上飯田村内部での耕地所持の具体相を追究しつつ、上飯田村の内部構造を検討した。また、上飯田村や島田村などの百姓が近隣の山で薪を伐採し、城下町に大量に売却していたことを解明した。また、同国小布施村で村内が市場のある町組と栗林の展開する林組を中心として4つに分かれていたことを見出し、林組の庄屋平松家による大規模な栗林経営の具体相を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：The principal researcher studied the relation between Iida castle city and the surrounding villages in Ina country, Shinano province during the Edo period, particularly, the city dwellers who had many cultivated fields in Kamiida village, and the forest lovers living in Kamiida or Shimada village, cutting down trees for firewood, and selling them to the city dwellers. He also studied the inner structure of Obuse village in Takai country, the same province, and made the fact clear that the village had four hamlets, the first and the second (they were called *Machi-gumi*) which were located around the market place, the third and the fourth (they were called *Hayashi-gumi*) which were located in the chestnut woods. And he examined concrete nature of the management of chestnut woods in a large way by Hiramatsu family which was the headman of *hayashi-gumi*.

## 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	200,000	60,000	260,000
2011年度	200,000	60,000	260,000
年度			
年度			
年度			
総計	400,000	120,000	520,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：日本史・経済史・近世史・地方都市・城下町・山林資源

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 1980年代以降、日本近世史研究分野では、近世社会全体の構造と展開過程を解明する重要なアプローチとして地域社会論が進

展し、多くの研究蓄積を得た。しかし、地方に多く存在した中小規模の藩の城下町や、農村に散在した在郷町などから成る地方都市は、それぞれの周辺農村と政治・経済・文化

等、さまざまな局面において密接に結びつき、地域社会を成り立たせる不可欠の存在だったと考えられるにも関わらず、近世社会全体のなかで都市と農村が相互にいかなる関係を取り結んできたかという点については、これまで十分に実証的成果が挙げられてきたとはいえない状況であった。

(2) 研究代表者はそもそも、信濃国北部 4 郡(更級・埴科・高井・水内)を対象に、ア. 米穀や大豆、小豆、粟、稗などの雑穀がどのように流通したか、イ. その流通構造が近世を通じてどのように変化してきたか、以上 2 点について、在郷町である高井郡小布施村(現・長野県上高井郡小布施町)、及び当該地域最大の都市である善光寺町(現・長野市)を重点的な検討対象として選定し、それらの社会構造分析をもとに考察してきた。その結果、A. これらの都市の存立基盤を強く規定していたのが町屋敷所持ちによって開かれた定期市であったこと、B. そこでもっとも重要な商品が米雑穀であったこと、C. 都市と周辺農村の住民は穀物商人の活動の媒介によって関係を取り結んだが、農業生産力の発展に伴い、穀物商人の存在形態、定期市の構造、および町屋敷所持ちと周辺農村の農民との関係、そのいずれもが近世を通じて変化したこと、D. 松代藩などの領主権力によって穀物流通は最大関心事のひとつであり、藩による領内統治の政策基調をも左右したこと、などを解明した。こうして具体的な場に即した穀物流通の構造の緻密な分析が、近世の地域社会構造全体を検討するうえで重要な方法になりうるとの見通しを提示したのである。

その後、研究代表者は検討対象を信濃国南部の伊那郡飯田藩領に広げ、まず同郡嶋田村(現・長野県飯田市)の地主森本氏が近世後期(19 世紀前半)に営んだ農業生産技術を検討し、肥料購入や穀物・里芋の販売及び贈答などに関連して、飯田城下町の商人や飯田藩士、近在農村の農民らと複雑で多様な関係を取り結んでいたことを解明し、さらに稲の品種や農法などについての知識を地域の人々との間でやりとりしていたことも明らかにした。続いて城下町である飯田町(現・同県同市)の特質について検討を行い、同町の成立期における人の移動や、飯田町の都市計画の後世への規定性、商品流通をめぐる都市内部の分節的構造や手工業者の存在形態、周辺農村との関係について研究する必要性を認識するに至った。そこで飯田町に隣接する、いわゆる「都市近郊村」である上飯田村(現・同県同市)の構造的特質に関する研究に着手し、a. 上飯田村がそれ自体の内部に都市的要素と農村的要素を抱え込んでおり、複雑な構造を呈していたこと、b. そこにさらに飯

田城下町の町人らが土地を求めて進出し、町人と地付きの農民との間で矛盾、対立を深めたこと、c. 都市と農村の関係を規定する上で、上飯田村の後背地にあたる山林が重要な位置を占めていたと予想されること、以上の 3 点に関する見通しを得た。

こうして研究代表者は、信濃国北部と南部の 2 地点を対象とした研究蓄積を通じて、地方都市と周辺農村とが取り結んだ交流関係についていっそう具体的に検討することの必要性を導き出すに至った。

## 2. 研究の目的

以上の点をふまえ、本研究では信濃国高井郡小布施村と、同国伊那郡飯田藩領のうち飯田町、上飯田村、嶋田村を扱うこととした。具体的には以下のアからウの解明を目的とした。ア. 17 世紀から 18 世紀初頭にわたって、飯田城下町の町人が周辺農村において、いかなる動機でどのように土地(耕地)所有を展開させたかを検討する。ここでは上飯田村内における町人の土地所有の具体相、およびそれをめぐる都市と農村の相克について論じる。イ. 18 世紀以後、飯田城下町の大店と周辺農村の豪農からなるグループが飯田藩御用達に任命されて展開した金融活動が、飯田藩領の都市と農村の関係をどのように変質させたかを検討する。ここでは飯田町における大店野原家と嶋田村における豪農森本家がともに御用達に任じられていた点に注目し、これらの家がどのような活動を行ったかを論じる。ウ. 小布施村における在郷商人の活動が、周辺村や城下町などを含む広域の社会構造を変容させるうえでどのような役割を果たしたか、を検討する。小布施村においては本研究以前に、6 家にわたる在郷商人の史料群の調査を終了しており、彼らが穀物のみならず、酒・油・魚・木綿・栗など多様な商品を扱っていたことまでは確認していたが、本研究期間内ではとりわけ小布施村の特産物である栗の流通をとりあげることにした。本計画は、信濃国飯田地域と小布施地域を対象として、城下町や在郷町など近世初頭、地域社会において成立した都市と周辺農村間における交流関係の成立過程と、近世を通じたその変容過程について通時的に研究を行うことを目的としたということが出来る。近世地域社会論は 1980 年代以降大きな研究蓄積を有するが、この観点からの分析はきわめて少なく、本計画はかかる状況を打開する意義を有していたのである。

## 3. 研究の方法

本研究計画の目的を達成するためには、現地における史料調査および情報収集が重要な意味を持つ。そこで飯田地域では多くの歴史資料を所蔵する飯田市教育委員会歴史研

究所を中心に、史料所蔵者として、社団法人下伊那教育会および羽場曙友会生産森林組合の協力を、小布施地域では財団法人北斎館及び小布施町教育委員会の協力を得ることとした。

#### 4. 研究成果

##### (1) 飯田地域における研究

①羽場曙友会生産森林組合所蔵文書、下伊那教育会所蔵野原家文書、飯田市歴史研究所所蔵「信濃国伊那郡上飯田村田畑山林地引絵図」の分析を通じて、飯田町人のうち上飯田村内に耕地を所持する者が同村に対して負担した「町貢」の実態解明を試み、近世城下町の町人が農村に耕地を所持したことの意味を追究した。その結果、ア・近世初頭の城下町建設に際して、伊那谷各地から移住した町人の多くが、上飯田村を中心とする近郊村のなかに新たに耕地・山林を取得したこと、イ・飯田藩は町人が近郊村の内部に所持した土地にかかる村役を免除したこと、ウ・17世紀後半から18世紀初頭にかけて、城下町において「御定借」と呼ばれた特権的商人が台頭し、上飯田村など近郊農村のなかに新たに耕地所持を拡大させたこと、エ・そのことは近郊村の財政状況を圧迫したこと、以上について明らかにした。さらにこれらの知見に基づいて、17世紀の飯田城下町の町人が上飯田村内に多くの耕地を所持していたことの意味を追究し、近世初頭に領主権力によって人為的かつ急速に城下町が創出されたことが土地所持のあり方に大きな影響を与えたことを指摘し、そのあり方が18世紀以後の城下町の構造をも規定した点を論じた。

②飯田市歴史研究所所蔵「信濃国伊那郡上飯田村田畑山林地引絵図」を詳細に検討し、都市近郊村である上飯田村の内部構造を現状との比較も含めて検討した。すなわち、上飯田村を構成する小地域である羽場・中山道・東野・および出来分（さらにその内部は町場である箕瀬町・愛宕坂と耕地である吉政・水



「信濃国伊那郡上飯田村田畑山林地引絵図」・部分

の手に分かれる) ごとに、田畑や屋敷の分布、道路や用水路の様相、山林の具体相などに

ついて、その所持主の性格も含めて包括的かつ分節的に検討し、当該地区の現状と比較しながら考察した。この作業を通じて、幕末維新期における上飯田村の景観を明らかにするとともに、当該時期、飯田町の町人が同村内の土地をどのように所持しているかについても解明した。

③上飯田村や島田村などの百姓が多く近隣の山に入り、伐組を結成して薪などを伐採・搬出し、城下町に大量に売却していたことについて解明し、これを都市近郊村における農村構造の特質として指摘することができた。すなわち、ア・飯田城下町近郊の村々にとって、薪の売却は農民の経営を支える重要な営為であり、村にとって、苜蓿採取権と並んで山中における薪の伐置権を保持できるかが最大の関心事だったこと、イ・これらの村は天竜川東部の中山間地の村々を含む村外の広範囲の人々を雇用することによりはじめて伐置を行うことができたこと、ウ・飯田城下町は薪の消費市場として重要な位置を占めており、そのことが都市近郊村に与えた影響は無視できないことなどを明らかにした。

##### (2) 小布施地域における研究

①近世小布施村林組の名主を務めた平松快典家文書を基幹史料として位置づけ、悉皆的な史料調査・撮影を終了することができた。その内容検討を進めた結果、以下のことを明らかにした。

ア・小布施村がA. 幕領町組Ⅰ、B. 幕領町組Ⅱ、C. 幕領林組、D. 松代藩領林組に分かれ、それぞれに名主が置かれていたこと、②それらは幕領であるABCと松代藩領であるDという政治的区分とともに、定期市が立ち物資の集散地であるABと、栗の生産地であるCDに区分され、小布施村が複雑な内部構造を有していたこと、小布施村全体の財政に関する帳簿を検討し、同村が林組2つ(松代藩領と幕領)、町組2つ(ともに幕領)の4組からなり、それぞれの利害の組み合わせによってさまざまな財政負担構造があることを見出した。

イ・平松家は松代藩領林組の名主として、また、大規模経営を行う栗農家として政治的・経済的ヘゲモニーを有しており、栗の上納に関する史料を多く翻刻したが、平松家とは別に、林組内において栗の上納を一手に請け負う林守と呼ばれる者が存在し、彼と百姓(平松家はこちらの惣代としての役割を果たした)との関係が組のあり方を規定していることを見出した。

ウ・小布施村内において在方市の運営に特

特化した町組と、栗の生産・領主への上納に特化した林組との間で、村政運営をめぐる競合関係が存在したことをあきらかにした。

②以上の研究と並行して、小布施村町組の名主を務めた関谷矩往家文書の所在を確認し、現地において現状記録調査を進めることができた。同調査は、中性紙封筒などを用いた保存措置を兼ねて進められた。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

①多和田 雅保、近世の山林における伐組と伐置—信州伊那郡の場合—、歴史学研究、査読無、893号、2012、13 - 24、80

②多和田 雅保、17世紀における町人の耕地所持—上飯田村の「町貫」—、飯田市歴史研究所年報、査読無、9号、2011、34 - 54

[学会発表] (計2件)

①多和田 雅保、近世の山林における伐組と伐置—信州伊那郡の場合—、歴史学研究会総合部会、2012年3月18日、早稲田大学

②多和田 雅保、上飯田村の「町貫」について、飯田市地域史研究第8回研究集会、2010年8月22日、飯田信用金庫大会議室

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

多和田 雅保 (TAWADA MASAYASU)  
横浜国立大学・教育人間科学部・准教授  
研究者番号：10528392